

# 生き物に語りかけてみる 実践アニミズム入門

安溪遊地 Yuji ANKEI

1951 年生まれ。京都大学大学院理学研究科修了（人類学専攻）。現在山口県立大学国際文化学部教員。日本生態学会自然保護専門委員として上関原発問題や西表リゾート問題にもかかわる。著書に『やまぐちは日本一』（弦書房）など。ホームページ<http://ankei.jp>

人間以外のものに話しかけたことはありだろうか。愛犬や、機嫌が良いときなら猫も、声をかければきちんと答えてくれて、コミュニケーションがなり立つ。このことは誰も否定しないだろう。

それなら、ドブネズミやカエルやヘビや野生の鳥たち、虫たちならどうだろうか。さらに、草や木は、そして山や川は、人間の呼びかけに応えてくれるものだろうか。

人間は他のすべての生命体とともにこの美しい星に属している。こんな自明のことを忘れて、人間が土地を「所有」できるなどという虚構が、この星をくまなく覆ってしまった 21 世紀。

他の生き物たちとの間の失われた絆を取り戻し、草木虫魚の世界の一員として今を生きなおしてみる [岩田、1973: 281] ための基礎的な訓練を、山口県の山村に居をかまえて妻とともに試みている私の、これは実習手帖である。

## 一、生き物に語りかける人たち

身の回りのあらゆる生物に語りかける人

物が私の身近にいた。母である。観葉植物などには、葉を一枚一枚なでさすりながら「もうすぐ咲くね」などと話していると、普通ではなかなか咲かないサボテンなどが大輪の花をつけるのが不思議だった。

母の遺した 1956 年 2 月の日記から。

流しの水の流れ口からいつもヒョイと顔を出す大きなドブ鼠。トラみたいに勇気があり、図太く私の顔を見ても逃げようとしない面構えをめでてオトラサンという名誉称号をあたえ、魚の切れハシ、芋のかけらといつも貢物をして可愛がっていたそのオトラ鼠がさっきスイと窓からとび込んで来たドーモ一な野良猫のために咬えられた。びっくりした私はホウキをもって何とかしてオトラサンを助けようと広い台所を走り廻って追かけたが遂々逃げて了った。窓からのぞくと白い雪の田圃道をオトラ咬えたノラ猫先生悠々と立去る。がっかりして冷たい台所にヘタバル。折角仲よくして手なづけていたのに……。昼から流しにたつのが億劫だった。第二代を育成するのは却々の難事業なのに。今更のよ

うにオトラサンがなつかしくなって流し口を眺めていた。

母は、台所の流し口の下あたりで暮らしていたガマガエルにも名をつけて「フクちゃん、今からお湯流すから、ちょっとどいててや」などと声をかけていたものだった。

雪深い田舎町の、むかし高峰譲吉さんが住んでいたという造り酒屋の大きな蔵に、ときおり家主のばあさまが皿に入れた牛乳をもって行く。「白ちゃん、白ちゃん！」と呼ばれるうちに、するすると太い梁から降りてくるものがある。酒蔵を守る巨大な白いアオダイショウであった。

こんな環境のおかげで、私はあらゆる生き物と話ができる幼心のときをもつことができたのかもしれない。しかし、科学万能の神話の時代に成長した私は、次のような行動をとる母親にはついて行けなかった。

ある時、母は、何年も花を咲かせない庭の梅の木を切ることにした。その晩のこと、着物の女の寂しげな後ろ姿が見えた。声をかけようとしたとたんにかき消える。三晩続けて同じ夢を見るにおよんで、彼女はくだんの梅の下に駆けていって叫んだ。「何よ、未練たらしい！物も言わんと毎晩でてきて……。わかったわ。今年は切らんといたげるさかい、くやしかったら花でもなんでも咲かしてみよし。」命拾いしたその梅の木は、翌年、枝いっぱい花を咲かせ、実までつけたのだった。母が逝って5年。今もその梅は春を忘れず元気である。

母は一人実践するばかりで、花や木やネズミと語る言葉をどうやって身につけたのかを語らなかった。

山口県の浄土真宗の寺の住職を母方とし、加計呂間島に生まれ奄美に大本教を広めた父をもつ母は、長じては京都で宗教新聞の記者として、様々な宗教者の生身の姿と出会った。そんな母にとって、花やネズミと話すことは、既存の宗教への深い幻滅を乗り越えて、まだ見ぬ南の島への憧憬を育てていく方法だったのかもしれない。

1970年代の始め、川喜田二郎先生の移動大学運動に触れてフィールドワークへのあこがれを植え付けられた私は、大学院で伊谷純一郎先生の指導を受け、西表島の廃村研究[安溪、1977]をへて南島の稲作史の研究に挑んだ[安溪、1992a など]。その後、西表島での無農薬稲作の産直運動に深入りし[安溪、1992b など]、その葛藤の突破口のひとつとして山口で自ら田を耕すようになって12年がたつ。この歩みは、まがりくねってはいるけれども、土着の人々の観察・聞き取りから参与観察へ、そして参与のありかたの反省と模索をへて、自らが「着土」[祖田、2003]をめざすようになるという道筋だったのだな、と今は理解している。

30年にわたる、西表島の人々とのつきあいの中で、島の人が生き物に語りかけるという場面に気づいたのは、わりあい最近のことだ。

例えば猪猟に同行を許されて経験したことであるが、罾にかかっている猪に、猟師がこのように語りかけるのを聞いた。「ミーハイユー、ボーレー！」訳せば「ありがとう、お利口さん！」とでもなるうか。直後に撲殺して、「来年もかかってくれよ！」と言う。今殺した猪が来年かかるはずはない、というのは科学の見方であるが、ここにあるのは、

猪の魂を海のかなたの楽園に送り届け、そこから島にもたらされる様々の豊饒とともにまた帰ってきてもらいたいと願う世界観だった。

また、今から40年ほど前までは、西表の山で果実などを採る時には、かならず「パーミ ヒリヨー」つまり「私にいただきさせて下さい」と声を出してから採ったという。

西表島西部では、リュウキュウコノハズクという鳥がチコホーと鳴けば翌日は晴天というが、「ミャウ」と猫のような声で鳴くと、これは縁起が悪いという。ひと昔前は瓶のかけらを投げつけて「チチナビヌ カキシナ ミンタン チクンドー」つまり、土鍋のかけらで目を突くぞ！などと叫んだものだった[川平、1990: 61]。これは、ミャウと気持ち悪く鳴く鳥が、西表島の英雄大竹祖納堂が滅ぼした与那国島の人たちの霊なのだという言い伝えによっている。西表の島びとの中には、夜の梢にとまってミャウとなく鳥に、「どうしてそんな鳴き方をするんだ。どうか、やさしく鳴いてくれないか」と繰り返し語りかけた結果、ついに晴れやかなチコホーの鳴き声になった、と語る人もあった。

その与那国島のある女性は、最近このように語ってくれた。

子どもたちが小さかったころ、食べるものを買うお金がないから、毎日海にいった、おかずを採ったのよ。まず、海に手を合わせて「あなたのいのちを私にいただきさせてください」と言ってから、岩についている貝を採るの。ひとつひとつの貝に、「ごめんなさい、あなたの命を私にくださいますか」と口に出して聞いてから採るか

ら、時間がかかるのよね。いっしょに行った仲間たちは、「何ぶつぶつ言っているの、先に行くよ」といって、さっさと行ってしまふ。寒い時なんか、私が戻ってきたときには、浜でほかのみんながたき火に当たってることもあった。でも、私は島のばあちゃんたちから教わった通りにするの。みんな「とっていい」というよ。というか、いやがってる貝はわかるから、採らないようにするのよ。魚を捕るときは、声に出すと魚が逃げるから、心のなかで、「ごめんなさい、あなたの命を私にください」と唱えてから獲るの。そうしたらちゃんと獲れるよ。

染め物なんかで生木がいるときは、山に行って「この木の枝を一枝だけもらっていいですか」と聞くと、いいか悪いかはだいたいわかる。一本だめだと、しばらくだめだから、たぶん山の区域があるんだと思う。「いい」という木の枝をほんとうに一本だけ切らせてもらって、そのあと、切った枝の先を、地面に挿木してくるのよ。この間、何年かぶりに島に戻ったんで、私がそうして挿木した場所を見て回ったけれど、知らないで人が踏みあらしてね、20本ほどのうち6本しか生きていなかったわ。

近頃は毎年、屋久島におじゃましている。縁あって地元の季刊雑誌『生命の島』に聞き書きを連載させていただいてもいる。

生き物に語りかけるのではあるが、その言葉がやや定型化している例を、屋久島の南側の原(はるお)集落で聞いたお話から紹介する[安溪・安溪、1997a: 52-53]。

子供のころ、小正月にはヤナギの棒でみかんの木を叩いて「みかん、ナーレ、ナーレヨ」と唱えました。自分の家のみかんだけじゃない、人のみかんまで叩いてまわったよ。柿の木にもやりました。

そこらの原の所にオニユリを採りに行く時は、まむしが一番恐ろしいから、それがいそうな所では棒で叩きながら、「マームシよけよ、薩摩のゴケドンに かまーんろ」といいます。ゴケドンというのは、豪傑どん。それに噛まれるぞということよ。そんな遊び方がありました。

小さい子供は飛んでいる鷹を見ると「オイヤ ナナツ ヤンドー（自分は七つだぞう）」と叫んで、もう大きな子供になっているからおれに掛かってくるな、といって叫ぶ習慣がありました。

福岡県二条町で開かれた「野草塾」という集まりで出会ったおゆきさん。あと2ヶ月の命と言われたガンから生還して、秋田県で小さな宿を始めた。ところが、意外な強敵があらわれた。カラスである。

宿への道や花壇に植えた草花をカラスたちがいたずらしてひどいんですよ。カラスの害を減らすために、いろいろな方法で試すんですけど、カラスの方が賢くて、どうやっても防げないんです。こまり果てた私は、ある日、道に出て大きな声でカラスたちに呼びかけました。「カラスさん、カラスさん。あなたがたの生活の場に入り込んで、じゃまをしましてごめんなさい！でも、私達もここで生きていきたいん

です。だから、おなかがすいて食べるんだったら、食べてくれていいけれど、おもしろ半分にはたずらで花を抜くのは、どうぞやめてもらえませんか。お願いします。」そのあと、不思議にカラスさんたちのいたずらはぴたっと止まったんですよ。

カラスと話す人なら、わが家の農業の師匠の津野幸人さんがおられる。彼は「農学部の教員のくせに農業もようせんのですか」と言われたのに発憤し、大学から20キロほど離れた山の中の荒地を買い求めて開墾を始めた。インドへの旅行で出会ったジャイナ教徒たちの徹底した不殺生にいたく感動した津野さんは、共生苑と名付けた自分の農園に立ち、今後ここでは、虫であれ蛇であれ鳥であれ、いっさいの殺生をしないことを誓った。その時以来、カラスたちの農作物への被害がやみ、山の鳥たちも津野さんが呼べば手の届くところまで近づいてくるようになった。しかも、それは農園の中にいる時だけではなく、大学のキャンパスを歩いているときでもそうなのだという。「私に殺気がなくなったということでしょうか。この方法による鳥獣被害の防除については、もう3年間ためして実証しています。農学方面では3年間実験したら学会で発表してもいいとされていますから、そろそろ発表しましょうかな」とおっしゃったことであつた。

これらの人たちのようにはなれなくても、その道を歩もうとすることはできる。そして、生き物たちに声をかけているうちに、それがいつのまにか習慣になってくる。

農のある暮らしを始めたころ、玄関の明かりの所に、アマガエルが何匹か止まって虫を

食べている。戸の開けたてのたびに、「カエルさん、動かすよ気をつけてね」というようになっていた。

岡山の農民には、畑に行くと、大声で「おはよう！みな元気か？」と野菜たちに声をかけてから、仕事にかかる人がいる〔安溪・安溪、1992：7〕と聞いて、これも何度かやってみた。

最近、畑で毛虫をとるときに妻がぶつぶつ言っているのを耳をすますと「ごめんね、虫さん」といちいち言っているのであった。

## 二、見えないものに語りかける人々

母の兄は若いころ、山歩きが好きだったが、ある時、一人歩いていて緑に覆われた山あいにかミがおられるのをまざまざと感じたという。そこで、大声で「男の神さんですか、女の神さんですか」と尋ねたところ、最も奥まった谷あいの、「ほとと思しき所から」、かぐわしい一陣の風が吹いてきた。女神という答えをもらった彼は「ありがとうございました！」と叫びながら、山を走り降りてきたのであった。

母もまた、晩年は山登りが生き甲斐であったが、私に注意して「山登りでは、道ばたの祠やお地蔵さんにむやみに手を合わしたらあかん」と言ったことがある。遭難した寂しい魂がついてくると大変だから、というのだった。

話しかけるだけではなく、時には沈黙を守らなければならない。稲をめぐる作法として与那国島で教えられた例から。

**稲を刈る時、刈り取る前に物音をたてて**

はいけない時期があって、その慎みの期間が解除されてから稲刈りが始まります。それはこういうわけなの。稲は、稲にやどっているカン（神様）が十分熟睡されてはじめてよく稔るのよ。だから、稲刈り前には神様の安眠を妨げないように、人間たちも静かに静かに過ごす。そして、稲がしっかり熟したなら、やさしく合図して起きていただいて、それから始めて私たち人間の手に渡されるのよ。これが稲刈りというわけね。

織物の原料のブー（苧麻）にも染める原料のアイにも、神様がいらっしゃる。染物や織物の材料にアイやブーを取る時、いきなり行ったらアイやブーにいらっしゃる神様が驚く。なんらかの合図をして寝ている神様を起こしてから近づいて行って、取らせてもらわないといけない。それは、ポンと石を投げてもいいし、オーイと言っても、咳払いしても、歌をうたってもいい。これをおこたって、神様が驚かれると、木が枯れてしまったりするのよね。神様が驚かれると、ブーならすぐ切れるし、アイなら染らない。

稲刈りに限らず、神様がしっかり眠ってくださらないと、私たちの暮しもうるおわかない。神様の心の平安が必要というわけ。もしも神様が怒りくるわれたら、こりゃあ地震とか津波とか噴火とかには限らないけれど、それこそえらいことになるわ。

「山でも川でも海でも黙って通るな」と教えてくださったのは、屋久島の「きんさん・ぎんさん」のあだ名をもつキヨさんとケサさんという2人の女性たちだった。ここで、与

那国島の習慣が、屋久島の人にもそのまま理解できるものだったということを知ることになる [安溪・安溪、2000: 236]。

遊地 沖縄の与那国という島ではね、トウガラシがあるでしょ、あれを畑で取る時に、いきなり取るなといいます。いちおう咳払いをするか、歌をうたうか、石をポンと投げてもいいから、それから取りなさいというんです。

キヨ ちょっと、しるしをね。

ケサ そうそうそう。

キヨ わたしらもね、どんなに小さくても、水の流れている所をまたいで越えるときは、「エヘン」と息づかいしてから渡るもんや。村の中ではせんでもいいけれど。

ケサ 小川でも神様がおるものやから、息づかいすれば、神様がよけていくでしょうが。

キヨ シジン（水神）様がおるから。

ケサ 山に行く時は、山の入り口で「ゴメンゴメン」というのよ。神様が驚いたらバチがあたるから、川でも山でも黙って通ると、昔の人は教えたもんですが、今の人にそんなことを言うと、「そんなバカなことがあるもんか」というだけでしょう。

キヨ 信じてきたのにねえ。

遊地 そういう気持ちをなくしたから、水が汚れ、川が汚れ、海も、人間の食べるものも汚れて、またサルも山に住めなくなって里に降りてくるようになってしまったと思うんですよ。古くから大切にされてきた智慧を若い人にも知ってもらいたいと思ってここに勉強にきています。

黙って通らない、というのは、目には見えない存在と出くわすかもしれない危険がある時に、ちょうど見通しの悪い交差点ではクラクションをならすように、人間の側が気を付けるべきことなのだ、という教えだった。そういうことも知らないで、海でも山でも川でも自分のもののように思いこんで時も所もかまわずに働いたりする人間には恐ろしい罰が下る、という話も聞いた。

屋久島には、すべての生き物は花でも虫でも「ひと」である、という宇宙観をもつ人もおられる。もと農業の〇さんは、死にかけた鯉の心臓マッサージを13時間もしたりする人物だが、もしも生まれ変わるならば、こんどは人間に食べられるようなものに、と願っておられる。彼は、人間だけが幸せになるような宗教は自分にあわないといい、庭に「万物の神様」という手製の像をまつてあらゆる生物の共存共栄を毎日祈っておられる [安溪・安溪、2000: 238]。

妻の貴子が、木の声を聞いたのは、屋久島が始めだった。友人たちとともに家族で白谷雲水峡を上がっていったとき、千年も経たらしりっぱなツガの木が語りかけてきた。人間の言葉ではなかったけれど、意味はよくわかった。人間の言葉になおせば「よく来たなあ」にあたる歓迎の言葉だった。それ以来、木と語ることはそんなに難しいことではない、と彼女は思うようになっている。

### 三、若者たちとともに実践してみる

屋久島の高齢者が伝えているような、こんな古い価値観は、今の若い人たちには通じないだろう、と思う人がいるかもしれない。し

かし、あいさつをして木に抱きついたり、カエルと話したりすることから始めるプログラムは、環境学習としての大きな可能性がある。

お世話になってきた屋久島へのご恩返しのつもりで、この5年ばかり、「屋久島フィールドワーク講座」という夏期セミナーで、「人と自然班」の講師を妻とともにつとめさせていただいている。

屋久島にあつまる若者の中には、水洗便所とまちがえてか、川で用足しをしてしまう人もいる。そんな時にどうすべきかを地元の人に教えてもらったことがある。「あのぉ、実はうちの学生のひとりがきのう、川でおしっこをしてしまったんですが……」までを言った時、昼寝しておられた90歳になるおじいちゃんは飛び起きて、「死んだか!？」と叫ばれた。以下は、その「死んだか!？」と心配された学生のレポートの抜粋である[安溪・安溪、2000: 256]。

島の人々の自然への接し方を知って人と自然とのかかわりの大切さを学びました。実は、私は初日、川で用をたしてしまっただけです。いろいろお話をうかがっているうちにとっても悪いことをしたな、どうすればいいの?と思ったんですが、かしわ手を打ってお詫びをして、川に焼酎を流して、塩をまいてくるといいんだよと言われて翌日さっそくやってみました。そうしたら、木を踏んだら木が痛いんじゃないかなと思えてきて、踏まないように歩こうとしました。そして、今まで見えていなかったものが見えてきて、森が私を受け入れてくれたような気がしました。

若者たちとともに、屋久島の山の中で一泊することもある。山で泊まる時にはその作法を覚える。大岩杉(現在縄文杉と称している木)を探し当てた岩川貞次さんに教わったとおり、トチカイ(土地借り)という儀式をすませてからテントを張る。50代の方の指導によれば、許しを求める言葉は心の中でとなえればヤマノカミに届くというが、90代の方の「山でも川でも黙って通るな」という教えからすれば、口に出して唱えるのが本来であろう。

そうした経験をした若者の感想から引用する(「屋久島フィールドワーク講座」のウェブページ参照)。

山の中で安全に一夜を過ごす方法を教わりました。カミガミの領域である山で一夜を過ごさせていただく……。なんて贅沢なことなんですか。そのためにはカミガミに宿をお借りしなければなりません。キャンプをする場所の周囲四箇所に酒・米・塩を捧げ「今宵一夜の宿をお借ください」とお願いします。これは宿泊する場所の周囲に結界を張り、そこで過ごす間は物の怪などからも守っていただくという意味があるそうです。そのせいか夜の野外トイレも恐れずに一人で行くことができました。なんだか護られているという安心感がずっと私の傍にあったような感じがしました。

今回のように自分の体験として山に対する畏敬の念を感じる機会は非常に貴重な体験でした。文献や人の話として聞くのではなく、自分たち自身が生身の人間とし

て自然の中で何を畏れ、何に感謝するのが問われる場面にはなかなか遭遇できるものでないからです。そういった機会を与えてくださったすべてにここで感謝するしかありません。

最近、山口で作っている田や畑に行っても屋久島式のあいさつ [ 安溪・安溪、2000: 253 ] をするのが習慣になった。若者たちがいるときには「どんな危険があるかもしれないから、あらかじめ自分にそれを言い聞かせるという意味もある」と説明してからともに祈る。言葉はその日の仕事の内容によって変わる。

田んぼのカミさま、畑のカミさま、山のカミさま、水のカミさま、ご無沙汰しております。もうしわけございません。今日は草取りをさせてください。火を焚いたりしてお騒がせしますが、どうぞお許してください。欲ではありますが、仕事の間、怪我のないようにお守りください。

仕事が終われば、やはり屋久島式だ。

今日はお疲れさまでした。おかげさまで無事草取りも終わらせていただきました。欲はいいません。人並みでけっこうです。どうか収穫までお守り下さい。ありがとうございました。

「……そうすれば、蜂に刺されることもなく、草で手を切るようなこともなく無事最後までできるのよ。あんたらは、田んぼや畑をする人だから、覚えておいたらいいですよ」

と言って教えてくださった屋久島のおばあちゃんの声が今も耳に残っている。

大学の講義でも、南の島の自然との共存の知恵の話をする時、学生がそれに応じてレポートを書いてくることがある。以下に示すのは、「神々からの警告 祖父、祖母の語った不思議な話から」と題するものだ。

私は、先生が講義の中で紹介された屋久島に暮らす人々の自然のとらえ方、私たち人類に対する大自然の警告に大変強い感銘を受け、多くのことを学ぶことができたので、その感動をレポートに綴り、自然の中における人間の在り方について改めて考えてみたいと思います。……

不思議な話を聞いていて、以前祖父から聞いた大変奇妙な話を思い出しました。私は広島県の山深い田舎町に生まれ育ちました。町といっても家の周りには田んぼが広がり、秋には家族総出でお米の収穫にあたるという農村です。おじいちゃんが私にはなして聞かせてくれたのは、この小さな町にある私の家の裏山の近くに突然現われた、ある小さな生き物にまつわる話でした。ある日、おじいちゃんが裏の田んぼの草を刈っているとき、おじいちゃんは何か黒いものが動いているのに気づいたそうです。その生き物のことをおじいちゃん是这样表現しました。

「ねこでもないし、もぐらでもないし、犬の子でもないし、かめでもない。とにかく見たこともない妙な生き物だった。色は黒っぽい感じで、体がまんまるで頭がどっちなんかよく分からなかった。めずらしい



生きもんだから、なんてゆう生きもんなんか獵師さんに見てもらおうと思って、その生きもんをひもで縛ってつかまえたところが、胸が悪くなるような気持ちの悪い声で鳴いた。その鳴き声は、低い声でグーグーというような、とにかく気味の悪い感じで鳴いとった。足はわりあいにおそかったからすぐつかまえられた。つかまえたときに短い足をひどうばたばたさせて暴れてのう、よう見たら真っ黒い毛の間に真っ黒い目があった。」

おじいちゃんはこの気味の悪い生き物をカブの荷台にくくりつけて動物のことに詳しい獵師さんのところへ見せに行ったそうです。すると獵師さんが思いもしないことを言いました。

「こりゃあTさん、とんでもないもんつかまえんさった。こりゃあ外道（げどう）さんじゃ、外道神さんじゃあ。こりゃあ、はよう元に戻してあげてないとええことなあでえ。」

これを聞いたおじいちゃんは、あわてて家へ戻り、その外道神さんを元の場所に戻したということです。外道神さんというのは、あまりいい神様ではないようで、私の家から1kmほど離れたおばあちゃんの実家の裏山に外道神様をまつる小さなほこらがあります。13年に一回、そのほこらのお祭りがあるそうです。とにかくおじいちゃんは外道神さんが現われてから何か不吉なことがあるのではないかと、しばらくの間はそのことを家族にもはなさなかったのだそうです。おじいちゃんがこの話を家族にはなして聞かせたのは5年ほど前のことだったのですが、驚くべき

ことに今度はおばあちゃんが去年の夏に家の裏を流れる小さな小川のほとりで、その外道神さんを見たということです。その外道神さんは何度もおばあちゃんの方を振りかえりながら草むらの中に消えていったということです。考えすぎかもしれませんが、この外道神さんが頻ぱんに里に姿をあらわすのは神々から私達人間に対する警告ではないかと思うのです。ここ10年ほど、私の町では山にある松が松喰い虫にやられるというので殺虫剤をヘリコプターでまき続けています。その影響かどうかはわかりませんが、たぬきがうちの畑で変死しているのを見付けました。また、田んぼにまく予防用の農薬の影響でほたるが激減しました。私が幼かった頃は、青々とした稲穂いっぱいにはたるの光がゆれていたものでしたが、今年は5匹ほどしか見かけられなかったほどです。考えてみるだけで、私の身の周りからは確実に自然が失われていっています。……

先日、実家の近くにある大きな大きな御神木が深夜、地を割るようなけたたましい音をたてて、ピシャッと真っ二つに裂けました。あまりに奇怪なことに、集落中の人たちが大本の周りに集まったそうです。私は、屋久島のOさんが「花」と表現した命の輝きが地球上から消えて行っていることを、この御神木は自分の命をたつことによって私たち人類に教えてくれたのではないか、と思いました。（1998年2月）

起承転結のはっきりしたレポートの力に感心して、伊谷純一郎先生にお見せした。すると師匠は、にやっと笑って「これヌートリ

ア違うか？」とおっしゃったのであった。南米原産の大型齧歯類が正体という説だ。弟子が怪力乱神の不思議に盛り上がっているときに、先生は　　そういう話も実はお好きであったが　　あえてそれを語られなかったのである。

なるほど。このレポートは「1990年ごろ、広島県　　町におけるヌートリアの初見」というタイトルにもなりうるわけだ。そして、クリックすると、「こりゃあ外道神さんじゃあ」の文章が出てくる。移入種問題を、列島の庶民がどのように受け止めてきたか、その歴史を総合的に明らかにするために、そんなしかけのあるホームページをこしらえてみようかな、と思っている。

おわりに

上にも述べたが、現在、大学教員としての勤務のかたわら山口県の山の中に住んで田畑を耕し、暖房に使うための2年分の薪を準備するという暮らしをしている[安溪・安溪、1997b]。地元の材木だけで価格破壊住宅も建てた[安溪、2004: 85]。

我が家のささやかな試みの経験から、不便は楽しいとまで断言する気はないが、なんといっても豊かな水と緑の中で体を思い切り使える生活はストレスを解消してくれる。

田舎暮らしには別の意味もある。重さとして年に7億トン強を輸入し(国民ひとり1日あたり16キログラム強)、1億トン弱を輸出して利益をあげる貿易に頼り切った今の日本人の暮らし[渡部、1995: 70]が当然と思っただろうか。今のような輸入・加工・貿易に頼る生き方しかイメージできなくなった日本人が、このぜいたくな暮らしと

引き替えに直面しているものは、1)輸出との差が生み出す行き所のないゴミと不法投棄の問題、2)輸入の半分以上をしめる原油の浪費による地球のいのちと環境の使い捨て、3)価格を先進工業国が決める貿易システムによる南北格差の拡大とそれへの怒りからのテロリズムといった深刻な問題である。食料や原油といった資源と権益の確保のために、我々は大義なき戦争や核武装にだれをうって入っていく危険がある。しかし、津野幸人さんは、現在の食生活の水準でこの列島で1億5000万人の人が食料自給できると試算している[津野、1995: 86]。日本の山には、使われていない雑木や杉・桧が腐るほどある[安溪、2004: 73]。

暗い暗いと言っていないで、足下にまず1本のロウソクを灯してみよう。　　そんな気持ちから選択した田舎暮らし。人間の力ではいかんともしがたい天候に左右される農的な暮らしの中で、南の島びとたちが伝えてきた、生き物と話し、目に見えない世界に耳をすます知恵の大切さが痛感されるようになってきたのである。

人間は、この星に生まれた生命という大家族の一員にすぎない。草木虫魚の一員であることを一人一人が主体的に自覚して生きる実践的アニミズムこそは、かつて国家が宗教を通して庶民の心の中まで支配し、従わないものを非国民として排除したこの国の歴史を繰り返さないための歯止めという意味も持っているとは私は考えている。屋久島の詩人山尾三省さんは、それを個人運動と呼んだ[山尾、2001: 165]。

いきなり、そうした実践をすることは難しいことだ。この30年ほどをかけて、いろいろ

るな方々に胸を開いてお話を聞かせていた  
だけるまでには、さまざまな関門とこちらの  
成長にあわせた段階があった。とくに、近代  
科学文明や文化の厚い衣を脱ぎ、素朴なこ  
ころそのもののあらわれであるような言葉を  
交わすには、お互いによほどの信頼感と安心  
感がなければならない。「欲ではありません  
が」という屋久島の祈り方も、私達が田を作  
るようになって初めて教えていただいたの  
だった。出会ってから毎年のように通って7  
年がたっていた。

それでも、例えばカエルと話していると、  
もののけの活躍する映画の中ならいざ知ら  
ず、世間の人の変な目で見られるかもしれない。

約2年間パリに住んでいたとき、映像人類  
学の催しで「上海の旧正月」という短編を見  
たことがある。爆竹が鳴る中国の町、おばあ  
さんが祭壇にいっぱいささげ物を飾り、線  
香を激しく振りながら、全身汗みずくになっ  
ている。激しい動きが一段落したところで、  
カメラが近づいていき、レポーターの声が尋  
ねる。「何をしていますか？」肩で息を  
しながらこの女性が投げ返した言葉は「迷信  
よ！」だった。宗教は実践だ。これほど懸命  
に祈っているのを見てまだ解説や評論の言  
葉が必要だというのか。国家の公式見解(=  
世間の目)を自分が知らないとも思ってい  
るのか。こんなすべての思いを込めた会心の  
ひとことだった。私も、さまざまな大宗教や  
科学技術真理教の洗礼を受けてなお滅びな  
い筋金入りのアニミズムの実践の道の模索  
の途上で人間中心思想の方々から「何をし  
ていますか？」という問いかけがあった場  
合には、満面に笑みをたたえてこたえよう。  
「やってみなけりゃわかりませんよ！」

#### 引用文献

- 安溪遊地、1977「八重山群島西表島廃村鹿  
川の生活復元」『人類の自然誌』雄山閣
- 安溪遊地、1992a「西表島の稲作と畑作  
南島農耕文化の源流を求めて」『琉球弧の  
世界』小学館
- 安溪遊地、1992b「無農薬米の産直が始ま  
った 島を出た若者への手紙」『エコノミ  
スト』7月21日号：76-79
- 安溪遊地、2004『やまぐちは日本一 山  
・川・海のことづて』弦書房
- 安溪遊地・安溪貴子、1992「農は楽し『第  
3種兼業農家』見習い日記」『耕作者』5: 6-7、  
日本耕作者会議
- 安溪遊地・安溪貴子、1997a「心の深い所  
をたずねれば」『季刊・生命の島』42:  
49-56(「生命の島」ウェブページ参照)
- 安溪遊地・安溪貴子、1997b「『日曜百姓  
のまねごと』から 第3種兼業の可能性を  
めぐって」『農耕の技術と文化』20号:  
127-145
- 安溪遊地・安溪貴子、2000『島からのこと  
づて 琉球弧聞き書きの旅』葦書房
- 岩田慶治、1973『草木虫魚の人類学』淡交  
社(講談社学術文庫から再版)
- 川平永美述、安溪遊地・安溪貴子編、1990  
『崎山節のふるさと 西表島の歌と昔話』  
ひるぎ社
- 祖田修、2003『着土の世界』家の光協会
- 津野幸人、1995『小さい農業 山間地農  
村からの探求』農文協
- 山尾三省、2001「遺言」『季刊・生命の島』  
58: 165
- 渡部重之、1995『共生の文化人類学』学陽

書房